

## ディスカッション成果 令和元年度 オーストリア・リトアニア派遣

### 1. リトアニアにおけるディスカッション概要

日時	9月21日
場所	パノラマホテル（ビリニウス）
プログラム名	Discussion with Lithuanian Youth
テーマ	National Identity and Social Activity
トピック	Social Issues, Youth Council
参加者	日本青年11名、リトアニア青年9名
スケジュール	10:00-17:00

### 成果

#### 1. リトアニアの現状

- リトアニア国内の若者に関する問題として、一番に挙げられるのは「若者の人材流出」である。より良い給料、より良い教育を求めて若者が他国へ行ってしまうようだ。この問題には、EUの特徴の一つである移動の自由化が影響している。そして、若者が流出するため、同時に高齢化も進むことになっている。
- リトアニアは独立を回復してから、非常に開放的になることを心がけてきた。国土は小さいものの、EUへの加入などを通じて、ヨーロッパの他の大国と全く同じ教育の機会を得ている。その機会を、積極的に活用するべく若者の啓発活動に取り組んでいる。
- Youth Councilの活動が活発で、政府の政策について議論し、実際に提言などを行っている。若者の政治参加は活発で、19歳で市議会議員になった若者もいる。

#### 2. 日本の現状

- 少子高齢化が深刻な問題
- 日本の若者の自己肯定感が、他国と比べて低いことが問題となっている。これは、自分が役に立たないと感じる自己有用感の低さに起因していると分析されている。（令和元年版「子供・若者白書」）
- 公益社団法人日本青年会議所がある。（青年の真摯な情熱を結集し社会貢献することを目的に組織された青年のための団体）

#### 3. 上記から学んだこと・気づいたこと

- 若者である自分たちが立ち上がらなければ、何も変わらないという意識が強い。この背景には、独立してから年月があまり経過していないという歴史的要因がある。同時に、若者のアクションが反映されやすい社会の仕組みもある。学生時代から様々な活動に参加し、社会的インパクトを与える経験をする。参加者の一人が、“The more you do, the more you get done”という表現をしていたのが印象的だった。こうした経験を経て幼少期や学生時代に学んだマルチタスクスキルを生かして働いていくという、好循環が生まれているように思う。
- 同年代でもしっかりと意見を持って活動し、プレゼンする姿に圧倒されました。また、リトアニア青年から私たちは、自分たちにはない社会を変えようとする意志の強さや自信などを感じた。私たちは危機感を持ち、自分たちは社会のために何ができるのか、帰国してどんなアクションを起こせるのかなど、深く考える機会となった。

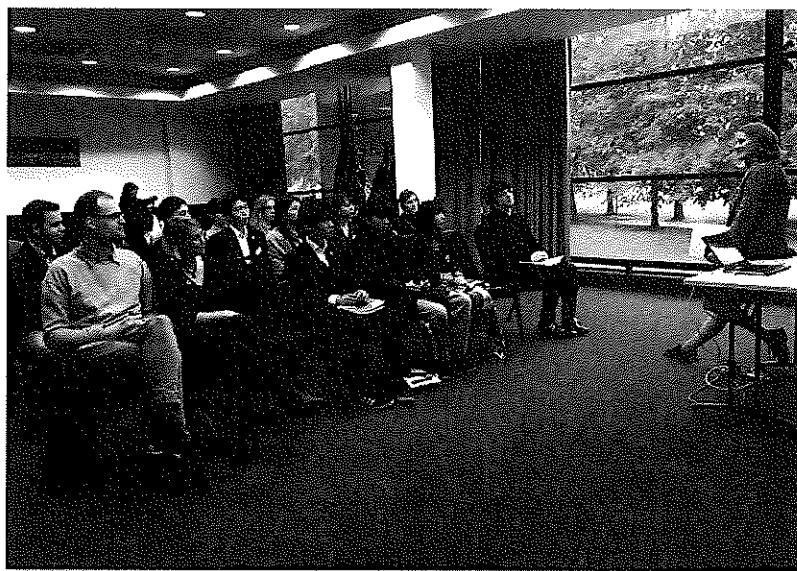
# リトアニアでの現地青年とのディスカッション感想

リトアニア人青年とのディスカッションは、とても有意義な時間だった。まず、二十歳前後の Youth Councilメンバーとして活動している人々の話を聞くことができた。彼らはリトアニア国内の若者に関する問題として一番に挙げられるのは、「若者の人材流出」であると言っていた。より良い給料、教育を求めて若者が他国へ行ってしまうようだ。これは EUの特徴の一つである移動の自由化によるものである。そして、若者が流出するため、同時に高齢化も進んでいる。この話を聞いて、リトアニアは、日本の地方と同じような問題を抱えていると理解し、EUという仕組みを身近なものとして理解することができた。

私は高校時代、生徒会メンバーとして理にかなわない校則を変えるべく積極的に活動していたが、「若いから」という理由で全然相手にしてもらえないかった苦い経験がある。そこで、「若い」ことが何か活動する上での障壁となるかを質問した。Youth Councilで活動するうえで、やはり年齢的に意見を言いづらい部分はあるようだが、自分の意見を述べるのに重要なのは、

年齢ではなく、事実や数字に基づいた説得力のある意見を言うことであると言っていた。日本社会に根付いている儒教的な考え方や年功序列などの影響が、日本の若者の自己肯定感や意欲関心の低さに現れていると思われるので、この問題についても考えていきたいと感じた。

リトアニア人青年は、若者である自分たちが立ち上がりなければ、何も変わらないという意識が強い。この背景には、独立してから年月があまり経過していないという歴史的要因がある。同時に、若者のアクションが反映されやすい社会の仕組みがあることも影響していると思われる。同年代の若者がしっかりと意見を持って活動し、プレゼンする姿に私は圧倒され、自分にはない社会を変えようとする意志の強さや自信を感じた。このディスカッションを通じて、日本人青年はカルチャーショックを受け、危機感を持った。帰国後、自分たちには社会のために何ができるのか、帰国してどんなアクションを起こせるのかなど、各々深く考えるとても良い機会となった。



## 2. オーストリアにおけるディスカッション概要

日時	9月30日
場所	オーストリア連邦首相府（ウィーン）
プログラム名	多文化共生ワークショップ
テーマ	What is Human Diversity?
参加者	日本青年11名、オーストリア青年8名
スケジュール	9:00-10:00 ファシリテーターによる講義 10:00-10:30 海外青年も含めて分科会ごとのディスカッション 10:30-11:00 グループごとの発表 11:00-11:30 海外青年と日本青年に分かれてディスカッション 11:30-12:00 グループごとの発表 12:00-12:30 振り返り

### 成果

#### 1. オーストリアの現状

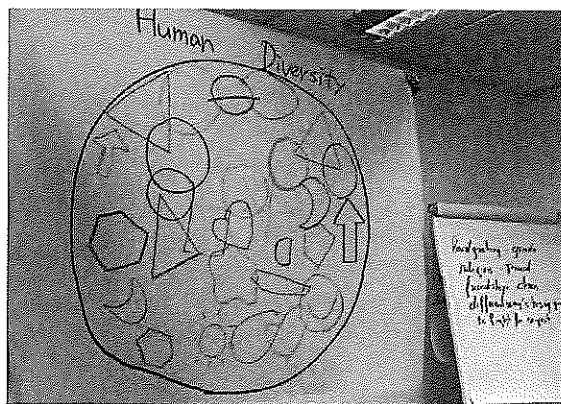
- オーストリアでは移民難民を受け入れており、アフリカ系の人々やオーストリア周辺の国からの移民が多く、多様性に富んでいる。
- オーストリアでも外国やそこに住む人に対してステレオタイプがあり、相手をこのステレオタイプを通して判断し、考えがちである。このことは子どもへの影響が考えられ、問題である。
- それぞれの名前の歴史について話し合い、名前の由来（歴史）やその名前自体がその名前をもつ人それぞれの家やその社会的地位、背景を表していることを理解した。

#### 2. 日本の現状

- 日本では急速に外国人が増加しており、他の移民が多い国と並ぶほど外国人は多いが、国民はそれをよく知らない。また、日本の制度により、移民として正式に受け入れている人数と実際に日本に移ってきている外国人との数にギャップがある。
- 急激な外国人増加に対して、教育や医療など様々な面で外国人対応が遅れている現状がある。
- 特に言語面の対応はヨーロッパの国々に比べて遅れている。

#### 3. 上記現状を踏まえた上での意見交換

- Human Diversityにはどんな要素があるかについて話し合いを行った。
- 話し合いで挙げられた要素として、ジェンダー（LGBTQ）・肌の色・性格・家・歴史（その人それぞれがもつ背景）・意見の違い・社会的地位（収入、経済）・年齢・職業・健康状態などがある。
- これらがどう混ざり合ってHuman Diversityを形成しているかについて話し合った。
- これらすべての要素はそれぞれに独立しているのではなく、すべてが互いに重なり合いながら、一つの世界を形成しているのだ、ということを話しあった。
- Human Diversityが実現した社会では、すべての人がどんな条件や違いをもっていたとしても全員が社会を形成し、参加することができる。
- 話し合いの内容を図で示して発表した。



# オーストリアでの現地青年とのディスカッション感想

今回のディスカッションでは、Human Diversityをトピックにファシリテーターからの講義が行われたのち、話し合った。現在の日本でもホットな話題である移民難民問題に関しても話しあうことができ、有意義な時間となった。ヨーロッパの国であるオーストリアとアジアの国である日本の青年が話し合うことで、大きく異なる互いの国の状況や多文化共生に対する意見を交換することができ、価値のあるディスカッションができたと思う。

日本とオーストリアでは距離も離れているが、話し合うことで、「皆が平等で支えあっていくべきだ」という思いは同じであると気付くことができた。そして、どの国でも、社会の急速な変化に素早く対応できるのは若い世代だと感じた。私たちもオーストリアの青年たちも、移民など自分とは違うものを受け入れることに対し

て柔軟な姿勢が見られて、これから若い世代の動きの重要性を感じた。

もともとオーストリアには音楽や芸術の国といった印象はあったものの、現地の人々の生活をイメージするのは難しかった。しかし、ディスカッションで年齢の若い青年たちと話し合ったことで、国や文化は違えども同じように目標や生活を持った、同じ地球市民であるということを体感することができた。私たちは外国への偏見や先入観を持ち、外国の方との交流を受け入れられないこともあるが、実際にそこの人たちと会って話すことでこのような偏見が変えられることがあると感じた。

今回のディスカッションを通して上記のことを学び、とても貴重な時間を過ごすことができた。今回の学びをこれから活動に生かしていきたいと思う。

